年頭雑感　2023 年　川勝　鋼太郎

また年が改まり、この世に留まれる日数がまた減ってきたとも感じる。

８０年も生きていると、当然であるが、世の中の動きも変わって来るものである。

小学生の頃は、日本が世界一と言えるものは殆どなかったような気がする。元より地勢的にも、資源的にも恵まれていないから当然であるが、人為的な生産物等についてもランキングの高いものが少なかったと思う。

それが戦後２０年もすると、建築物や交通機関などで世界一あるいはそれに近いものが珍しくなくなってきた。もっとも世界一と言っても、良いものだけでなく、通勤ラッシュの混雑なども世界一だったような気もする。

その後、世界をリードしていた電子産業などでは生産設備の優位性は少なくとも数年間は安泰と言われたほどだった。海外での著作も日本を礼賛するものがあった。それがバブル崩壊後に風向きが目立って変わってきたのは大方も認めるところだろう。今まで改善または改革を怠ってきたことが、クローズアップされていると思う。女性による社会活動への進出の遅れ、社会の現状に対応しているか疑問の教育制度、労働時間当たりの生産性の低い企業、等々諸外国に比較して、先進国としては低いランキングにあるという情報がしきりに見られるようになった。

今はコロナの影響も相まって暗い影を落としているが、このような状況でそのまま受け入れて、どうしようもないと諦めて過ごすのも面白くないことである。

まず現状を見ると、まだ日本はソフト的にもハード的にもインフラの整った国体を維持している。世界一安全な国とも言われている（もっとも近頃は奇怪事件も起るが）。このような特長をさらに向上させて、諸外国に寄与することを考えるべきだろう。

また地域的にみても大陸の一部の国々と比較して危険性の少ないところに位置しているのは、島国だから当然かも知れないが、平和ボケすることなく、苦境にある国々を救済する手段を模索・提供するべきだろう。

ここ数年のニュースでも政治面では汚職・失言などによる閣僚の辞任などの記事が目に付く。本来の目的を遂行してもらいたいもの。

ネットで提供されるニュースでも国内の小さな出来事を主に挙げている気がする。ほほえましい記事もあるのだが、海外の記事をもっともっと取り上げるべきであろう。戦争は個々の人生を即座に奪うものであるし、そこまで行かなくても悲惨な状態の国も人も溢れる程いるのだから。そのような情報の基盤がなければ国際感覚などは身に付かないと思える。

数十年前には考えられなかったほど、留学でも研修でもまたスポーツでも海外へ志向・滞在する人々が多くなったが、そういう知識を身に着けた人々が、日本の若い世代にフィードバックしてくれて、変革が進むようになれば、まだまだ日本も捨てたものではないといえるのではと、初夢と終わりたくない願望を。

事務局からのお知らせ

皆様、新年おめでとうございます。

本号では珍しくスペースがあるので、この機会に 3 月の定時会員総会（以下、総会）に向けた業務の流れについて記し、皆様に事務局の業務の一端を紹介させて頂きたいと思います。

毎年のことですが年が明けると、事務局としては総会に向けての準備が本格化します。

具体的には、「令和 4 年度事業報告書」と「令和 4 年度決算書類」の準備、これらを含めた所轄官庁への書類提出の準備（総会後、3 月末までに提出）、会員の方々への総会の案内の発出と出席者の確定などです。

先ず 1 月の理事会で「事業報告書（案）」の概要説明が行われます。提案責任者は専務理事です。2 月中旬には監事により、先ほどの「事業報告書（案）」及び「決算書類（案）」や会計帳簿類の監査があります。この監事監査での承認を受けて、2 月の理事会（いわゆる決算理事会）で総会に上程される「事業報告書（案）」と「決算書類（案）」が最終決定されます。このように、総会に「事業報告書（案）」と「決算書類（案）」が上程されるまでには、1 月理事会、監事監査、2 月理事会と 3 度に亘る公式の手順を踏むことになります。

この作業日程を総会を起点として遡って見ると、当たり前のことではありますが、一連の事務作業が総会という目標に向かって収斂していく様子が良くわかると思います。

さらに、所轄官庁への届け出には、当然決められた書式・様式での提出が必要なため、会計事務所と連携した作業が必要となります。会計事務所も短期間での会計処理（前年 12 月末までの会計帳簿を監事監査までに纏める）を行うために、期日を限ってのデータ処理が必要であり、事務局としてはこれに対応した事務を進めていきます。これらの作業の一方、公益法人会計として満たすべき財務基準（収支相償等の 3 基準）のチェックも併せて行います。

この他に事務局の作業としては、理事会の資料準備や議事録作成、会員の皆さんへの総会案内・配布資料の発送、出席会員の確定などがあります。

こうした手順を踏んだ準備作業の積み重ねにより、総会当日を迎えることになります。

なお、毎年総会に出席される会員の方々へのご案内・出欠確認については、定足数の関係もあり会員有志のご協力を頂いております。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

今年の総会は、オンラインで 3 月 25 日（土）開催の予定です。多くの会員の皆様のご出席をお待ち申し上げます。本年もよろしくお願い申し上げます。

Initiatives of Change
一人ひとりのチェンジで信頼を築く

IC ニュース NEWS

Vol.36

公益社団法人　国際IC日本協会

発行年月日 2023 年 1 月20 日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルネル206号
TEL：03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail：info@iofc.jp HP：http://iofc.jp
<International IofC>HP：www.iofc.orc
頒価 1部 200円

世界共通の問題に一緒に取り組む年　会長　藤田　幸久

【他人ごとではない自分の問題】

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

世界の分断が加速しています。コロナ禍とロシアによるウクライナ侵攻は，世界の諸問題が「他人ごとではない自分の問題」となった幕開けです。戦争、エネルギー、食料、医療、金融、環境などの問題が私達の暮らしと命に直結しています。

これら全ての分野で覇権争いと秩序の崩壊が起きています。独裁国家が増えていますが、日本を含む民主主義国における分断とモラルの崩壊も深刻です。

しかし前向きに考えれば、国、民族、宗教、職業などを超えて様々な問題に一緒に取り組む時代の到来です。もはや「他人ごと」ではないからです。対面の会議は減りましたが、ZOOM も活用して世界の人々と一緒に問題解決に取り組めるチャンスです。戦場もコロナの世界感染もスマホで見られる時代ですので。

【各国での草の根イニシアチブ】

IC は各国で様々なイニシアチブを展開しています。

1　ロシアとウクライナの IC の皆さんがスイスやフィンランドでの IC の会合に一緒に出席しました。ロシア側からの謝罪を皮切りに感動的な交流が始まりました。

2　スイス・コーの IC センターは昨年３月から約３０人のウクライナ避難民を受け入れています。欧州各国の IC はウクライナ避難民の受け入れやウクライナへのきめ細かな人道・財政援助を行っています。女性の多くが国外に避難した中、国内に留まった IC の女性メンバーが物資の配給並びに心のケアの活動を行っています。コーには１９９０年代以来「自由の基盤」(Foundations for Freedom) という民主化支援会議にロシアやウクライナなど旧東欧から多くが参加し、そのネットワークが活きています。

3　Trust building Program(信頼醸成プログラム) という事業が各国で展開され、ネパールやナイジェリアでのプログラムは国連の Intercultural Innovation Award（異文化イノベーション賞）を受賞しました。

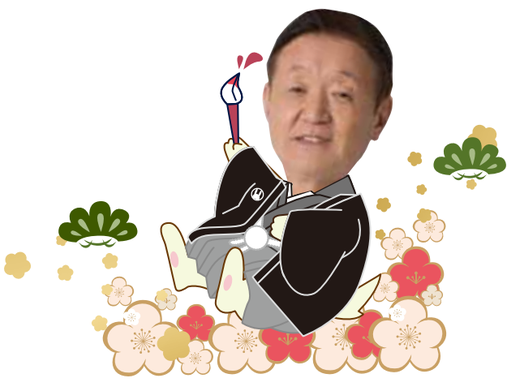
他にも各国でチェンジをもたらすイニシアチブが草の根のように展開されています。

【スイス・コーやインド・パンチガニ―での会議再開】

今年は３年ぶりに大きな国際会議が開催予定です。

（1）インド・パンチガニー国際会議

1 月 18 日～ 26 日「未来のための心とわざ」



パンチガニー国際センター５５周年、同劇場５０周年を記念して南アジア諸国などの人々を中心に、今後の IC 活動の目標や活動などを語りあう会議。

（2）スイス・コー世界会議

○7 月 18 日～ 22 日　会議「過去の傷を癒す」

○7 月 24 日～ 26 日　会議「民主主義を機能させるための公職者の誠実さと人格」

【戦争を経験せぬ時代を目指して】

国際 IC 評議会のジェラルド・ピレー会長は昨年の世界総会で「過去 70 年間は平和が戦争に勝った世界史上特別な時代でした」と述べました。

私は平成 31 年 2 月 24 日の天皇在位 30 年記念式典に参列させて頂きました。現在の上皇様の次のお言葉を今でも心に刻んでおります。

「平成の 30 年間、日本は国民の平和を希求する強い意志に支えられ、近現代において初めて戦争を経験せぬ時代を持ちましたが、それはまた、決して平坦な時代ではなく、多くの予想せぬ困難に直面した時代でもありました」

「島国として比較的恵まれた形で独自の文化を育ててきた我が国も、今、グローバル化する世界の中で、更に外に向かって開かれ、その中で叡智を持って自らの立場を確立し、誠意を持って他国との関係を構築していくことが求められているのではないかと思います」

その 3 年後の昨年 2 月 24 日にロシアのウクライナ侵攻が始まりました。今こそ世界全体が「戦争を経験せぬ時代」を目指す時です。戦争やコロナなどの問題が世界共通となった今、各国の皆さんと一緒に取り組むチャンスです。

本年の皆様のご協力を心からお願い申し上げます。

新しい年、いつまでも現役で新たなチャレンジを続けましょう。　副会長・専務理事　足立 憲昭

皆さま、新年を迎えてお元気にお過ごしでしょうか。昨年、心に残った出来事を共有したいと思います。

私は、公益社団法人 国際 IC 日本協会の副会長・専務理事に就任してから、毎年成長させていただいております。私にとって、昨年最大のイベントは「矢野会長(旧)から藤田会長(新)への引継ぎ」でした。その中で、公益事業の「国際フォーラム」と「学校訪問プログラム」に少しだけ主体的に活動できました。また、「新ホームページ」と「アーカイブ(FANW)」にも参画できました。

最近、「70 歳 80 歳を笑顔で超える生き方(精神科医 和田秀樹著)」というタイトルの本に目を通しました。色々とトピックが盛りだくさんの本ですが、関心をもったのは、「大脳は、前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉の 4 つの部分からなっていること」です。そして、老化に影響するのは前頭葉であること、「前頭葉は知識社会に重要な部位であることから、脳の中でももっとも遅く成熟し、そして、もっともはやく老化すること」です。その前頭葉を老化させない方法として、「感情の老化をさせないこと」であり、具体的には、「相手の身になって考えられる」、「過去の成功談を話さない」、「ファッションや美味しいものに関心を持ち、おしゃれに過ごす」、「毎年新しい挑戦をする」などです。

昨年の残念な出来事では、私をＭＲＡ(ＩＣ)に導いてくれた、小嶋千鶴子さん（イオン株式会社名誉顧問）が 2022 年 5 月 20 日永眠されました。106 歳でした。私が 26 歳のとき、大阪市福島区のジャスコ大阪本社で、西日本地区の採用プロジェクトリーダーをしていましたが、小嶋千鶴子さん（当時人事本部長）から部屋に呼ばれて、「私の代わりに、この集まりに出てきなさい」と言われました。そのとき、何も知らずに訪問したのが、兵庫県神戸市の住友グループの「住吉研修所」でした。

その後、東京都千代田区のジャスコ東京本社に転勤して、能力開発部員となりましたが、そのときの人事本部長も小嶋さんでした。小嶋さんから教えていただいた言葉の中で印象に残っているものを少しご紹介したいと思います。私が今も大切に思っていることです。

能力開発部員として、セミナー企画をしていたとき小嶋さんから「同じテーマで５冊の本を読みなさい、その５冊で共通部分が重要なところであり、残りは関係ないので、重要なところを纏めなさい」。

労使関係グループの一員として、春の賃金改定に向けて資料を作成するとき、労使交渉の合意書を纏めるとき、小嶋さんから、「考え方(理念)が重要であり、賃金の上げ幅ではないこと。考え方（理念）がないと経営がダメになる」、ここは、決して譲ってはならない。

私が 30歳の時に提携した子会社（長野県松本市のディスカウントストア）の総務部長として、社長と二人が派遣されたとき、小嶋さんから言われたのは、「あなたが赴任すると、優しく親切に近づいてくる人がいるから、気をつけなさい」、その人たちと逆に「あなたがやろうとする事に、ことごとく反対する人が現われるから、大切にしなさい」。

話は変わりますが、私は、一社)日本能率協会の専任審査員として、品質並びに食品安全のマネジメント認証(ISO9001、ISO22000、FSSC、JSF-C)の対象工場を審査しています。昨年度は、月に２～３回のペースで審査しました。 折角与えてもらった機会なので、審査で訪問する地域の名所・旧跡を訪ねました。印象深いのは、福岡櫛田神社(追い山)・福岡宗像大社、岡山後楽園、山口防府天満宮、岩手県大船渡、山形県天童神社などです。その都度、新しい発見があります、同時に、日本をもっともっと勉強しないとだめだなと反省します。では、今年も失敗を繰り返しながらチャレンジしたいと思います。

私と IC　中嶋　邦子

明けましておめでとうございます。

今年が皆様にとり良いお年であります様に、お祈り致します。

そして、ロシアのウクライナ侵攻の終結、コロナの収束で世界に一日も早く平和と安心が訪れます様に。

昨年末、日本の MRA 運動の原点でもある MRA ハウスのお披露目会へお招き頂き、財団のご配慮による皆様との暖かな会で IC への思いを新らたにする機会を頂き大変感謝しております。

私と MRA（IC）との出会いは、四十数年前のスイス・コーの体験でした。

写真で見る通りのスイスの景色、ディズニー映画の舞台にもなったといわれるマウンテンハウス、そこから見渡すレマン湖の眺め、どこか観光客気分の私でしたが、そこでの出会いはそんな夢のような世界とは全く違うものでした。

世界各地からの参加者から聞かれるのは、新聞や TV で見るだけの遠い国のニュースではなく、貧困や紛争、弾圧等々に苦しむ人々の生の声でした。

コーは私にとってまさに、毎日届く「生きた新聞」のような場所であり日々でした。

それまでの自分がいかに無知で無関心、自分本位であったか、無関心でいることの罪深さ、恥ずかしさを痛感し、それを「控え目」の都合のよい言い訳にし、面倒な事から逃げている自分にも気づかされました。

こうした、大きな気づきと共に、滞在中ご一緒させて頂いた元会長、相馬雪香先生の「人には誰でもそれぞれに与えられた役割がある」とのお言葉が今も私の大きな励みとなっています。

しかし、今、その後の自分をふり返りますと、自分なりに IC の活動に参加し、学ばせて頂きながらも、自分に与えられた役割に気づけないまま無力感ばかり感じていたように思います。

気づけば、仕事、介護、自身の体調と、言い訳は増え、IC からは遠く離れてしまっていました。

そんな折りのお披露目会へのお招きは、私の心の鏡に積もった埃がきれいにとり除かれ、IC への思いを映し出して下さったような気がいたしました。どんなに IC から離れてしまっても、知ってしまった以上、「知らなかった自分には戻れない」ことを改めて感じています。

私には立派なチェンジの体験はありませんが、「元には戻れない自分」これが私のチェンジだと思っています。

ささやかでも自分の居場所で自分にできる精一杯のことに努力を惜しまず、これからも IC を私の生きる道しるべとしたいと思っております。

家族と IC との関わりを振り返って　足立　恭子

私がＩＣと初めて関わったのは 3 歳の頃です。ＭＲＡアジアセンターで開催された国際会議に参加し、温かく優しく話しかけられた記憶が残っています。それから40年以上経ち、自分の息子と国際会議に参加する機会もでてきました。

私は看護師なので、身体的・精神的な危機を抱える人たちに遭遇する機会が日常的にあります。そのときにかいま見るのは危機的状況を乗り越えていく人たちがいることです。

落ち込んでも、倒れても、回復していく様は、人間の力の素晴らしさを感じると同時に、決して一人の力ではなく、周りの人の関わりによって回復していく姿もみてきました。

人との関わりを避けて社会生活を営むことは難しく、そのコミュニケーション力は人との関わりで培われるものだと思っています。そのため、息子が生まれたときは、人と関わる機会をできるだけ大切にしようと考えてきました。また、一人っ子故、親中心の関わりになりがちだからこそ、周囲の力を借りながら社会に育ててもらうほうが、より強くしなやかに育つのではないだろうか？と考えるようになりました。

今振り返って感じるのですが、息子にとっての IC との関わりは、成長過程で、より視野の広い社会とつながる機会をたくさん与えてくれました。子供がまだ未就学児のとき、数年間に渡りホームステイ先の一つとして参加させていただき、海外留学生と生活する時間をもちました。

まだ「横浜(ヨコハマ)」も言えず、何度言っても「ヨホカマ」になってしまい、留学生と大笑いしたこともありましたし、多種多様な留学生にたくさん遊んでもらいました。 9 歳の時には、国際会議の休み時間でホワイトボードに大好きなティラノサウルスを描かせてもらったことがあり、休み時間後のミニセッションでその恐竜について一人で説明することになり…一体どんな説明をするのだろうと親の私としては気が気でなく、かなり緊張していたことを覚えています。

そして、昨年の IC 国際フォーラムでは、駐日ウクライナ大使による基調講演に参加させていただきました。質疑応答の時間、13 歳になった息子が挙手をしたときは、9 歳の時と同様、やはり私の方が緊張してしまいましたが、本人に後で聞いたところ、折角の機会だから、緊張するけれども質問をしよう！と思ったそうです。

さらに周りからたくさん声をかけてもらい「温かくて優しい人たちが多い場所だね」と話す息子に、私が 40 年以上前に感じたものと同様のことを感じた息子をみて、なんとも温かい思いがこみ上げてくるような気持ちになりました。

このように振り返ってみますと、IC という場が子供にとって多様な社会とつながる場であり、親子で成長させてもらっている場であることがわかります。

今後もいろいろな可能性を模索できるための良き指針のひとつに IC という場で多様性を認め合い、許容しあいながらも、自ら主体的に考えて行動に変えていけるようにありたいと考えています。